

【論文】

ワークショップ「風景の発見」

——美術館による環境学習プログラムの初歩的事例——

How to Read Townscape: A Report on Workshops
for Environmental Activities by the Miyagi Museum of Art

新 田 秀 樹*
Hideki NITTA

In August of 1983 the Miyagi Museum of Art organized a series of workshops for environmental activities as a related project to the exhibition "an Encounter with the Sights around Us." The workshop series comprised four programs in which participants were encouraged to make critical appraisals of the local environment utilizing different recording methods as follows: photographing, making graphic scores, rubbing and making personal maps. The participants were required to present their personal responses to the aesthetic qualities of the visual, acoustic and tactile environment.

The author, who coordinated the workshops, reports the outline of the project as the first step of participatory environment-based education by an art museum.

1983年8月、宮城県美術館は、展覧会企画「風景との出会い」の関連事業として一連の環境学習ワークショップを実施した。ワークショップは、参加者が身近な環境を新たな目でとらえることができるようにするための四つのプログラムから構成された。その表現方法として、写真、音の記号化、フロッタージュ(擦り取り)、風景地図の四つが用いられた。参加者は環境の視覚的、触覚的特質を感性によってとらえ、表現することを求められたのである。

このワークショップのコーディネーターである著者は、この企画の概要を、美術館による参加型の環境学習の初歩的事例として報告している。

はじめに

宮城県美術館では1983年7月30日から9月15日まで特別企画「現代日本の美術・2——風景との出会い」を開催した。本企画は展覧会とワークショップの二部門により構成され、第一部展覧会は「風景の表現」、第二ワークショップは「風景の発見」と題された。

展覧会部門では絵画、彫刻、版画のほか、写真、映画、ビデオなど、現代の美術のさまざまなジャンルから87人の作家を選び、その風景表現を展覧した。展覧会では、観衆は美術館の展示室という外界から隔絶した特殊な空間のなかで、作品に表わされた風景のイメージと出会うことになる。そこに何らかの風景体験が成り立つとして

* につた ひでき

宮城県美術館学芸員 Curator, The Miyagi Museum of Art

連絡先 宮城県美術館 〒980 仙台市川内元支倉34-1 Tel 022-221-2111

も、それは、作者によってすでに出会われた風景との出会いであり、どこまでも想像上の風景体験である。

いうまでもないことだが、一方でわたしたちはこうした“風景作品”を媒介としない直接的な風景体験を日常的にもっている。わたしたちは、ふだんは芸術という意識とは別の次元で外界を知覚し、環境と相互関係を形づくりながら生きている。ワークショップはこうした日常の素朴な風景体験を、プログラムされた遊びのような作業を通して掘り起こし、記述してみることをねらいとしていた。

このワークショップは、したがって、野外写生会や風景画の描き方の講習とは区別されねばならなかった。芸術作品として風景を描くのではなく、参加者と環境との直接的な関りに着目し、環境にたいする知覚レベルの気づきを、記号化という作業を通して視覚的に表現してすることが主眼であった。そのためには、参加者がワークショップの過程を「芸術的」な行為であると考えないようにすることがむしろ重要になる。「じょうず」、「へた」という技能的な評価は意味をもたないこと、「芸術」的手法を用いるにしても、それは手段であり、目的ではないことを知らせる必要があった。

ワークショップでは“風景”に、目に見える環境像のほかに、聴覚、触覚などによる環境像も含めることにした。“風景”概念をこのように拡張したのは、身体と環境の関係を多面的に捉えていこうとする考えからである。

1. ワークショップの構成

ワークショップでは、8月11日から14日まで、次のような四つのプログラムを各一日ずつ実施した。(1)「カメラが見る風景」、(2)「仙台・音の散歩」、(3)「まちのフロタージュ」、(4)「風景地図をつくろう」。それぞれのプログラムは、(1)が視覚、(2)が聴覚、(3)が触覚あるいは至近の視覚に対応し、(4)は体験の総合をねらいとするものであった。これらはいずれも、仙台市内を“散歩”しながら行なうように計画され、参加者は各回共通の、書き込みのできる市内エリアマップを持ち、それをもとに参加者自らがコースを設定する一種のオリエンテーリングのようなものになった。夏休み期間中だったこともあり、応募者は小学生と母親の親子連れや学生、教師など、年齢、職業はさまざまで、人数は平均して各プログラム20人前後であった。以下は、各プログラムの進行手順の概要である。

(1)「カメラが見る風景」 インストラクター／山崎博(写真家)

山崎氏は写真というメディアを用いて、“観測者”としての客観的な視点を作品表現に生かしながら、風景への新しいアプローチを試みている写真家で、本企画の第一部・展覧会部門の出品作家のひとりでもある。

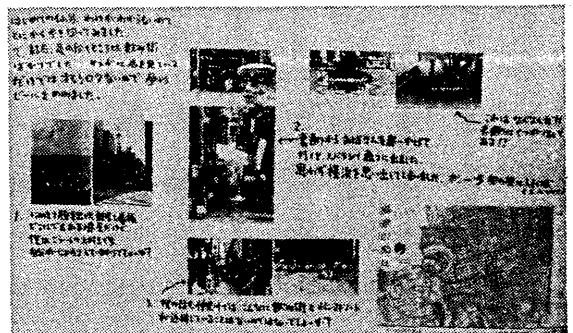
当日は、山崎氏による自作品の写真プリント数十枚をもとにした30分程度のオリエンテーションのあと、参加者は個人またはグループで美術館を出発。カメラ持参で市内のウォーキング・ツアーを約3時間行なって美術館にもどり、市内の一時限現像ラボで仕上げたサービス判のカラー・プリントをパネル上に言葉の説明をそえて視覚的に構成し、最後に創作室周辺の壁面に参加者全員の手で陳列した。

山崎氏によるオリエンテーションの要点は次のとおり。

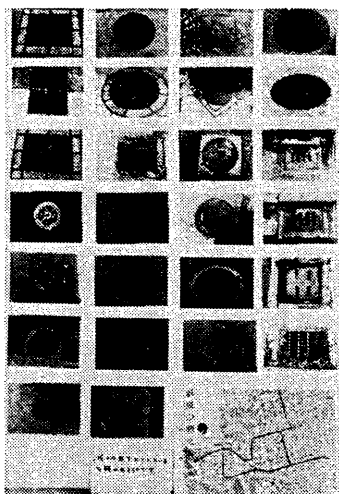
- ① ふだん街を歩いて興味をもってはいるが「風景写真」にならないと思っていたようなものをテーマに写してみる。(何を撮るか、出発前に決めなくてよい)
- ② 対象は気にかかっているものでよく、きれいなものでなくてよい。決して「名作風景写真」、「良い写真」を撮ろうと思わないこと。
- ③ ウォーキングの過程で関心の対象がそれていってもかまわない。最初に決めたテーマにこだわらないこと。
- ④ 写したものを連続写真のような形式で自由にならべてみる。歩いたコースの地図とコメントもつけよう。
- ⑤ 何枚か平面的に(必ずしも直線的でなく)連ねて見るとき、自分が興味をもっているものが浮かび上がってくるようにプリントをパネル上に構成してみる。

使用機材は、参加者ができるだけ技術的なうまいへたにとらわれないようにするために、“バカチョン・カメラ”の使用を原則とした。撮影対象としては、コース上の「工事現場」、「バス停」、「路上のごみ」、「交差点」、「並木」、「色づくし」、「文字づくし」、など街の特定の視覚的エレメントに焦点を絞ったものが目立ったほか、歩道橋からの定点観測、昔の通学路の線的な記録なども見られた。

〔写真1〕「カメラが見る風景」制作例1



〔写真2〕「カメラが見る風景」制作例2



プレゼンテーションにはレイアウトという造形的な作業が含まれており、とまどう参加者もいたが、その場合にはインストラクターのアドバイスがなされた。完成後、陳列された各自の体験記録ひとつひとつについて講師が講評を行なってこの日のプログラムを終えた。

(2)「仙台・音の散歩」 インストラクター／若尾裕
(広島大学助教授・音楽教育)

現代の生活環境は人工的音源が発するさまざまな音に満ちており、自然音は次第にかき消されて行く趨勢にある。こうした聴覚環境の変化に主体的に対応するために＜音風景＞(sound landscape)の概念を提唱し、その風景を聞きとり、批評できるような音の感受性を養う訓練(サウンド・エデュケーション)の必要性を主張しているのがカナダの作曲家マリー・シェーファーである。このプログラムのインストラクター若尾裕氏は早くからこのサウンド・エデュケーションに注目し、その実践を試みている研究者である。本プログラムは、氏の指導によって美術館を中心とするサウンド・スケープを対象に、“音の感受性をとりもどすためのアクティビティ”を行なうことを目的とした。

当初の計画では仙台市内のサウンド・ハンティングを行なう予定だったが、一日の日程では無理があると思われたので、計画を変更し、美術館構内のサウンド・マップづくりを目標とした。以下は、若尾氏によるアクティビティ進行の概要である。前半は創作室での予備訓練である。

＜午前の部＞

- ① 60×40センチメートルくらいの紙をできるだけ音が

出ないように隣の人に渡してゆく。一巡する間、発する音を聞く。

- ② 次にその紙を丸めてボールにする。丸める時の音を聞く。そのボールを壁にぶつけたらどのような音がするか想像してみる。壁にぶつけてみてその時の音を聞く。

- ③ 全員ができるだけ音を立てないように椅子からゆっくり立ち上がり、そのあとでゆっくり腰をおろす。このとき、自分が少しでも音を出したと気づいたら姿勢を凍結する。(自分が出す音を知覚するアクティビティ。)

- ④ 音を視覚的に表現してみる。インストラクターが発する四つの音(a. 木のおもちゃ——ラトルを鳴らす b. ドアをやや乱暴に開閉する c. 口笛を吹く d. 床を踏み鳴らしながら歩く)をカラーマーカーを使って絵にする。具体的な絵は描かないこと。(鈴の音がしたとき音源である鈴の形を描いたりしない。)音を抽象的な形、線、色などで表わしてみる。(直観的なイメージ変換)各自で四つの絵をバラバラにしてグループで1から4に分類してみる。

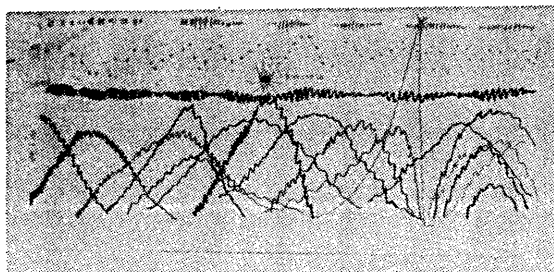
- ⑤ 創作室のテラス(屋外)に出て3分間聞こえる音に耳を傾ける。室内にもどって、聞こえた音を音源の名または擬音語でリストに書き出す。

- ⑥ リストにした音をいくつかのやり方で分類してみる。

a. 「自然音」「人間音」「機械音」/b. 「単発音」「連続音」「断続音」/c. 「好きな音」「きらいな音」

- ⑦ リストや分類表を参考にしてテラスで聞いた音の情景を絵にしてみる。やりかたは、先に練習した、音を抽象的に描く方法を用いる。作曲家になったつもりでグラフィックな楽譜を作ってみる。

〔写真3〕「仙台・音の散歩道」図形楽譜制作例

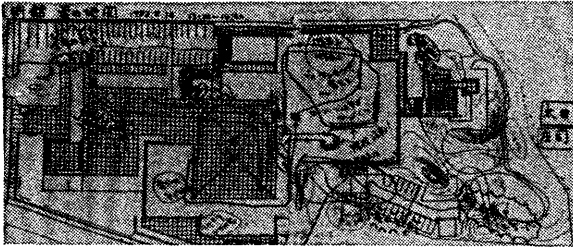


＜午後の部＞

- ⑧ 「美術館サウンド・マップ」を作る。参加者は二人ずつ組になる。どちらか一方が目隠しをし、他方は手をひいて美術館の内外をガイドする。ガイド役は歩き

ながら相手が感じ取った音の表現をメモに書きとめておく。一巡したら役割を交替して創作室にもどり、音の記憶とメモをもとに各自構内の地図に音の印象をグラフィックに描き入れて音のイメージ・マップを作ってみる。〔写真4〕

〔写真4〕「仙台・音の散歩」美術館のサウンド・マップ制作例



(3)「まちのフロッタージュ」 インストラクター/真壁智治(建築家)

このプログラムは、凹凸のある物体の上に紙を置き、鉛筆やクレヨンなどで紙を擦って物体のテクスチャを写しとるフロッタージュの技法を利用して、街の手触りの風景を視覚化してみようというもの。インストラクターは、1960年代から70年代にかけて「都市のフロッタージュ」などの企画により、身体とのかかわりに着目した体験的都市論を展開した真壁氏に依頼した。進行は、まず午前中約1時間、創作室テラスでフロッタージュの基礎的トレーニングを行ってから市内の繁華街に出て、フロッタージュによる街のテクスチャの採集を行なった。用紙はB3サイズのPMパッドと芯ペンシルを使用した。真壁氏によるトレーニングのあらましは次の通り。

- ① 自由に好きなものを擦ってみる。(見ておもしろいものと、擦ってみておもしろいものとは必ずしも同じでないことがわかる。)
- ② 規則的な手の動かし方で擦る。
- ③ 表面に応じて擦り方を工夫して変化させてみる。
- ④ ガラスを擦ってみる。
- ⑤ 中庭に出てタイルなど境界を持って隣接する異質な表面を選んでみる。

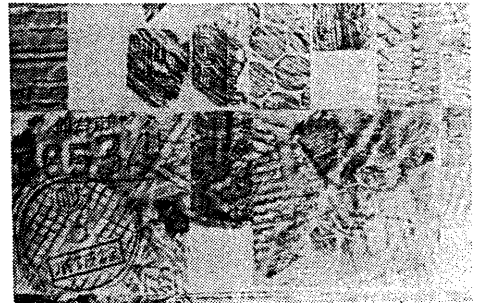
フロッタージュの擦る作業では手だけでなくからだ全体のリズムが重要で、習熟すると技巧にとらわれずに擦る作業に集中できるようになる。商店街の歩行者天国の雑踏の中で地べたにはいつくばるようにしゃがみこんで路面のフロッタージュを採集することも、慣れてくると大人でも恥ずかしがらずにできるようになった。

〔写真5〕「まちのフロッタージュ」歩道の凹凸を擦る



昼食をはさんだウォーキングのあと、午後からは、集めてきた道路や壁、フェンス、看板やナンバー・プレート、マンホールの蓋などのさまざまなフロッタージュをもとにパネル上にコラージュを構成する作業を行なった。器用さの差が出にくいフロッタージュだが、この段階で苦労する人もいたのはやむを得なかった。このワークショップのねらいは、フロッタージュの断片を素材にした美的構成にあるのではなく、身の物理的世界のテクスチャを発見するきっかけとすることにあった。コラージュによる構成の美術上の評価は、この際問題にならないことはいままでもない。

〔写真6〕「まちのフロッタージュ」フロッタージュを素材にしたコラージュ制作例



(4)「風景地図をつくろう」 インストラクター/せんだい景観研究会, 真壁智治

前記の三つのプログラムでは、写真の撮影(視覚)、音の図像化(聴覚の視覚化)、表面の擦り取り(触覚の視覚化)というように、知覚の領域はある程度限定されており、表現方法もかなり明確であったが、この最後のプログラムでは、漠然とした街のイメージを何らかの方法でできるだけ総合的に記述する方法を探りたかった。そのために、ケビン・リンチをはじめとする内外の都市研究者による都市のイメージ調査、多木浩二氏による記号論的アプローチの実践、ローレンス・ハルプリンのMotationの概念、松岡生剛氏によるワークショップの

経験談などを参照しながら、美術館スタッフとせんだい景観研究会、真壁氏の間で検討が進められた。(せんだい景観研究会は市役所、青年会議所、民間の建築事務所などに所属する若手の人々による、地域の景観問題研究のための私的な研究グループである。南部繁樹氏ら10人からなる同研究会は市民の景観意識の調査に強い関心を持ち、本プログラムの企画の初期段階から美術館側スタッフと共同作業を行ってきた。)

具体的な課題は、ウォーキングのコースをどう設定するか、あるいはコースを限定せずポイントだけを設定し、参加者の自由な歩行にまかせるか。どのような共通の知覚目標を設定するか。どのような共通のアクティビティを行なうか。それらの結果をどのような形のプレゼンテーションにまとめるか、などであった。

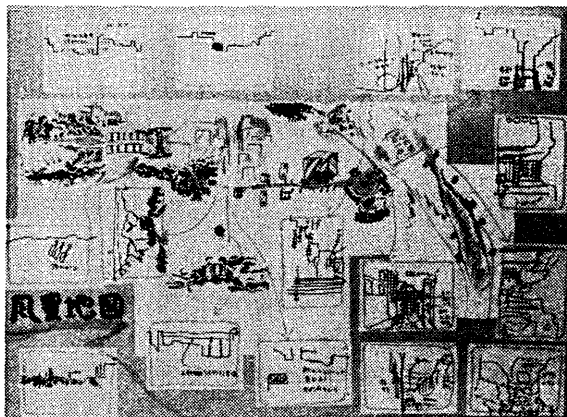
検討の末、一応の結論として次のようなプランが決定された。

- ① 美術館を起点として主要なコースを4通り設定する。
- ② 出発前にエリア・マップに自分がよく通る道、好きなところきらいなところなどをマーカーで記入。
- ③ 参加者は歩きながら木、建物のような「物」、通り、公園のような「場所」、人の集まりなどの「出来事」といった要素別にそれらの印象を地図に記録してゆく。
- ④ 途中、道が交差するところで見通しの遠景の輪郭——スカイライン——を一筆書きで描く。(これだけが唯一の共通のアクティビティとなる。このために出発前に創作室テラスで十数秒に1枚のスピードでスカイラインを描く練習を行なう。)
- ⑤ 美術館に帰着後、パネル上にコースに沿った自分だけの「風景地図」を再構成し、それを陳列する。

〔写真7〕「風景地図をつくろう」交差点で見通しのスカイラインを描く



〔写真8〕「風景地図をつくろう」風景地図制作例



2. 評価と課題

宮城県美術館では、創作活動中心のワークショップ・プログラムを創作室で定期的に開催しているが、今回のワークショップは展覧会の関連事業として企画されたものであり、創作活動を目的としないという点で通常のワークショップとはやや性格が異なる。それは芸術表現をめざすものではないが鑑賞教育とも違う。私たちは街の景色を写したサービス・サイズのスナップ写真を「鑑賞する」とは言わないし、紙屑を丸める音や自分の骨が鳴る音を「鑑賞」の対象と考えたりもしないだろう。このワークショップのねらいは、結局、今まで鑑賞教育の対象とされなかったものを見たり聞いたりすることにあったわけである。

この種のアクティビティを知覚トレーニングとしてとらえる場合の評価の難しさは経験者が指摘するところである。都市学習や環境教育の手法研究が立ち遅れているわが国では、このようなワークショップの前例が少ないこともあって、企画者のねらいがどこまで実現できたか、方法は妥当か、参加者に結果として何が有効な体験として残り、ワークショップの後では環境を見る目がどのように変化したかなどについて、検証や評価が十分に蓄積されていないのが現状である。今回のワークショップでも、最後の総合の試みでは企画者側自身が方法の模索の段階を完全には抜け出すことができなかった。生活者を環境イメージの心理学的、社会学的調査の対象として客体視するのとは逆に、このような活動を人々の自己啓発の手段としてとらえ、構造化するにはどうすればよいのかといった基本的な問題から、まず考えてゆく必要があるように思われる。

さらに、こうした活動がなぜ美術館の教育活動とし

て行われなければならないのかという議論も当然予想される。これは「美術館」の性格づけに関わる問題であり、答えは断定的なものにはなりえないであろう。美術館は絵画や彫刻のようないわゆる純粋芸術のみを扱うのか、欧米の美術館に見られるように建築や都市環境にまで目配りをするのか、あるいはさらにアート・センターとして現代芸術の諸領域のクロス・オーバー現象に対応して対象を広げるか、また教育活動の形式は鑑賞教育を中心とするのか創作教育を含めるのか、ワークショップ形式を導入するかしらないか、コミュニティとの関りをどのようなかたちで実現するかなどについての、政策的な自己規定により答えが決まってくる。美術館像の選択には理想化された唯一のモデルがあるわけではなく、選択肢は多様であると考えらるべきであろう。今回のワークショップは、とりあえず美術館像として広めの性格づけを選択してみた場合の、「教育普及プログラム」のやや特異な一例であると考えたい。

参 考 文 献

- 飯田勝幸：「街路の空間譜」『建築文化』1975年2月号
- 倉田依子・清水禮子：「東京——山手線駅前街路29×4」『建築文化』1975年2月号
- Shafer, R. Murray.: A Sound Education. (世界の音楽教師にサウンド・エデュケーションのプロジェクトを呼びかけた実践マニュアル。タイプ打ちの小冊子。発行年の記載なし。)
- Southworth, Michael and Susan.: Maps: A Visual and Design Guide. New York Graphic Society Books, 1982. (牧野融訳『地図—視点とデザイン』築地書館, 1983年)
- Graphic Society Books, 1982. (牧野融訳『地図—視点とデザイン』築地書館, 1983年)
- 多木浩二：「都市の経験——〈記号分析学〉の次元として——」『新建築』1976年3月号
- 多木浩二：《都市のフロッタージュ》「指先のたどる風景」『美術手帳』1976年6月号
- 都市社会研究所「宝島マニュアル」『宝島』 年 月号
- 中村良夫：『風景学入門』中公新書, 1982年
- Halpin, Lawrence.: "Motation," Progressive Architecture, July 1965. (六鹿正治訳「モーターション」『PROCESS: ARCHITECTURE』№4, 1978年2月号)
- 真壁智治：《都市のフロッタージュ》「都市へのアプローチ」『美術手帳』1976年6月号
- Lynch, Kevin.: The Image of the City. MIT Press, Cambridge, 1960. (丹下健三・富田玲子訳『都市のイメージ』岩波書店, 1968年)
- 「新写真論1・山崎博の眼」『カメラ毎日』1983年2月号
- 「バンクーバー『音の散歩』——マリー・シェーファー編集の《バンクーバー・サウンド・スケープ》より」芦川聡訳『音・音楽・子供の会報2』1982年7月